探究力等の育成関係事業

とやま科学オリンピックの開催

参考資料６

現　状

とやま科学オリンピックの開催

○ねらい
- 子どもたちの科学に対する関心を高め、論理的な思考力など、その可能性を伸ばす
- 自然科学や人文・社会科学に共通する科学的なものの見方、考え方を身に付けさせる
- 富山の自然や環境、歴史、文化、産業、人物などを背景とした問題を解くことで、ふるさと富山に対する誇りと愛着を醸成する

高校部門物理分野（R1）

○概要

【小・中学校部門】（県内4会場で8月の土曜日に実施）
- 小学校部門は5，6年生、中学校部門は1～3年生が参加
- 算数（数学）、理科、国語・社会の統合問題（120分）

【高校部門】（富山大学理学部で8月の平日に実施）
- 高校1，2年生に加え、中学校3年生も参加可能
- 数学、物理、化学、生物のうち 1分野（150分）

普及啓発活動

○「富山県教育フォーラム」の開催
- 知事より成績優秀者を表彰
- 3回以上参加した生徒に記念章を授与
- 外部講師による講演会

有人潜水調査船「しんかい6500」パイロット石川暁久氏による講演（R1）

○「親子でチャレンジとやま科学オリンピック」（案内パンフ）の配布
- 小学校4年生全員に配布し、次年度の参加を促す

新「親子でチャレンジ体験教室」の開催（R元年度より）
- 小学校3・4年生の児童と保護者が過去問題や科学工作・実験を体験（科学オリンピックと同日に富山会場で開催）

○「とやま科学オリンピック体験セミナー」の実施
- とやま科学オリンピックに関連する実験・観察等を理科教員が体験し、授業への活用法などを学ぶ

全国大会への出場

○科学の甲子園（高校1・2年生）
○科学の甲子園ジュニア（中学1・2年生）

科学オリンピックの成績を元に県代表メンバーを決定

課　題

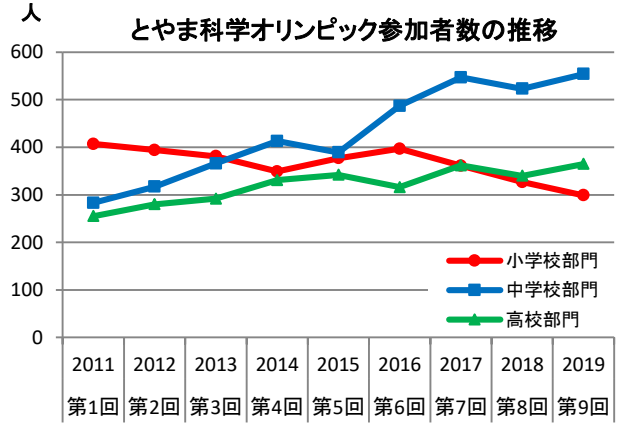
作問委員の負担

○小・中・高校の教員が各部門・分野ごとに開催する作問部会に参加（年間10回程度）
- 特に小学校教員のほとんどは担任であり、学校の負担も

○作問委員が大会当日の運営（試験監督等）も担当

作問委員の負担軽減が必要

参加者数の伸び悩み



○特に小学校部門の参加者数がここ3年間連続して減少している

【考えられる要因】
- 土曜日に行われる他の行事（スポーツ少年団等の大会、ダヴィンチ祭など他の科学イベントなど）への参加
- 保護者の多忙化（小学生の多くは会場までの送迎必要）
- 「科学オリンピックは難しいというイメージ」（児童生徒、保護者や教師に面白さが十分に伝わっていない可能性）

○一度参加すると、毎年連続して参加する児童・生徒が多い

児童生徒・保護者・教師への更なるPRが必要

対応の方向性

作問委員の負担軽減

○外部人材の更なる活用
- 大会運営スタッフとして学生アルバイトを活用
- 作問委員として退職教員の活用を検討
- 採点スタッフとして非常勤教員の活用を検討

○小学校部門における実技問題の導入を検討
- 筆記問題数を削減することにより作問業務を省力化

とやま科学オリンピックの魅力アップ

第10回記念大会として内容を充実

○小学校部門における実技問題の導入を検討（再掲）
- わくわくするような実技問題（工作など）の設問を検討

○「親子でチャレンジ体験教室」の充実
- 本大会とは別日程、別会場での開催や体験内容の魅力アップを検討
- 参加定員枠の拡大

○「富山県教育フォーラム」の充実
- 子どもたちが科学オリンピックや教育フォーラムに参加したくなるような著名な講師の招聘
- 科学オリンピック参加経験のある大学生に自らの体験等を語ってもらう機会の設定を検討

○普及啓発活動の充実
- 科学オリンピックの過去の問題や教員向け体験セミナーの過去のテキスト等の活用を周知
- 教員向け体験セミナーの回数の増加と内容の充実